



未来につなげたい、大切な記憶

UNFORGETTABLE MEMORIES LEADING US FORWARD

岡山市中心部に推進室を開設

11月8日（水）、RSK山陽放送丸の内会館（岡山市北区丸の内2-1-3）1階に本法人推進室が開設されました。当日は、RSK山陽放送代表取締役社長里見俊樹様、原憲一本法人理事長、長島愛生園入所者自治会会長（本法人理事）中尾伸治様、長島愛生園歴史館主任学芸員田村朋久様による序幕式の後に、室内がお披露目されました。

今後、室内には自由に閲覧いただけるハンセン病関連の書籍と映像を充実させ、当室を皆さまに長島へ足をお運びいただける契機となる情報センターとして活用する予定です。



序幕式



室内で歓談する出席者

令和5年度通常社員総会

11月19日（日）、本年度の通常社員総会を長島愛生園社会交流会館（むつみ交流館）大会議室で開催しました。当日は正会員総数82者中、57者の皆さま（内、44者は委任状提出）にご出席いただき総会が成立している報告がなされた後、議長に原憲一理事長が選出されました。審議事項はありませんでした。

事務局により令和4年度事業の報告及び令和5年度事業の進捗状況が報告された後、NHKで1979（昭和54）年に放送された『昭和回顧録「長島愛生園」昭和10年前後』（30分）を視聴しました。これは、長島愛生園が1950（昭和25）年に製作した『長島開拓』（長島愛生園歴史館蔵）を、当時を知る同園関係者がアナウンサーと視聴しながら質疑応答した様子を収録したものです。

総会終了後には、令和5年度第2回理事会が同会場で開催されました。事業計画及び活動予算の変更が議決され、長島愛生園「恩賜記念館」現地調査の実施や（本号5ページ参照）、2019年12月に作成した本法人パンフレット第2刷に小変更を加える第3刷の作成が承認されました。



『長島開拓』の一場面



長島愛生園探訪-未来に届けるかたちを探る-

9月17日（日）と18日（祝）の二日間、本法人建造物保全・史跡等調査ワーキンググループは現在実施中の長島愛生園
 悉皆調査の一環として園内の建造物や史跡、景観の現状を参加者で共有するフィールドワークと、それらの背景にある歴史と文化を未来に届ける無形、有形なかたちを探るワークショップを開催しました。宿泊を含む会場は、本年4月に開館した愛生園の社会交流館（むつみ交流館）を利用させていただきました。

初日は34度の最高気温を記録する残暑が厳しい日でしたが、参加者は各自が二日間「担当」する『愛生』誌を読み込み、アイスブレイクを経て歴史館で基礎的な知識を習得した後、園内で心にとまった建造物や景観を撮影しながら4時間以上にわたるフィールドワークを行いました。むつみ交流館での夕食の後には「開拓患者上陸地点」に集合し、対岸の小豆島や牛窓の灯りを眺めながら夜の愛生園を体感しました。

2日目の朝には光ヶ丘に登り、昇る朝日を眺めながら午前6時に目の前でつかれる恵の鐘を聞きました。むつみ交流館をチェックアウトした後は大会議室で大月先生と豊橋技術科学大学助教パク ミンジョン先生の講義を受講し、スミ カオリさんによるワークショップ（次ページ以降参照）を開催。参加者は「これからも考え続けたい問い」を発表しました。

フィールドワーク・アテンド

大月 敏雄

東京大学教授（本法人理事）

フィールドワーク・アテンド

片岡 八重子

株式会社ココロエー級建築士事務所・代表取締役
 （本法人ロードマップ委員会・委員）

ワークショップ・ファシリテーター

スミ カオリ

全日本捏造協会・会員／喫茶さざなみハウス・書生

総括

釜井 大資

本法人理事兼事務局長

参加者（21名）

東京大学大月研究室関係者

京都大学前田研究室関係者

アテンド関係者



『愛生』誌を読む



アイスブレイク



相愛での発掘ワーク



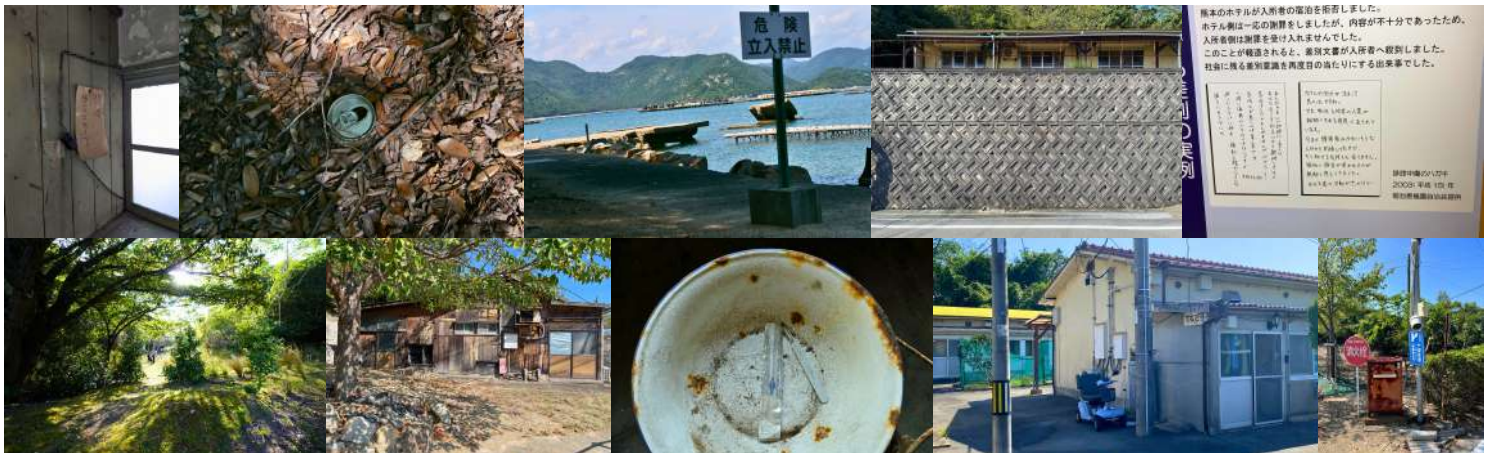
光ヶ丘・恵の鐘



講義の様子



捏造ワークショップ発表



参加者が撮影した長島愛生園（一部）

言葉にするには悩ましい

「長島愛生園探訪」ワークショップを企画・進行して

さざなみハウス 書生・日本捏造協会 会員
スミ カオリ

今回のワークショップでは企画と進行役を担当しました。私自身は現在、歴史館の映像室で語り部の皆さんの映像をとにかく視聴しています。自分に焼き付いて離れなくなるまで、見聞きし続けなければならないという思いに駆られています。私自身が、現実きちんと戻ってくるためです。そして参加者の皆さんにも、それぞれのスタイルで同様の時間を持つ必要があると考えています。

私自身は、多くの人の顔が目には浮かぶような活動を、今後も企画・進行していきたいと考えています。その端緒となる活動として、いささか説明不足であった今回のワークショップについての言い訳と補足になればと思い、以下1・2に内容と気づきを整理し、担当としての感想も報告いたします。説明の順番・構成が見づらくも知れませんが、文責はスミにあります。

1 研修全体の趣旨

「未来に届けるかたちを探る」の人権学習的解釈。

- (1) 探る：「羅針盤としての人権感覚」を涵養する契機とする。
- (2) 未来に届ける：人を理不尽に苦しめた過去の事実を繰り返さないために「選択肢を増やした上で、協働的に判断する習慣を身につける必要性」に気づく。
- (3) かたち：フィールドワークで身体に充満している状態で、自分もその場に居る状態で、「具体的に」考える。
- (4) 構成

①アイスブレイク

事前に配付した機関誌『愛生』の号数順に、無言で並ぶ。

②「欲しいものの必要なもの」act.

my wants → my needs → human rightsの順に具体例を検討しながら、人権とはどういうものを理解するための人権学習の基本アクティビティ。(人権教育啓発推進センター監修)

③フィールドワーク(別項参照)

④捏造ワークショップ

歴史の画期となった事実について、あり得たはずの別の選択肢を想像し、選択される要因を検討することで、将来、重大な判断をする際に、あり得る選択肢を多様に想定した上で、よりよい選択をすることの練習となることを目指す。

- ・「らい予防法」「呂久長島大橋架橋」についてのレクチャー(NPO事務局長釜井氏)
- ・「らい予防法が廃止されていたら」「架橋が実現されていなかったら」の続きを相談しながら想像。
- ・模造紙に書いて、内容と相談プロセスを報告。他のグループから気づきと質問をコメント。

⑤「これから考え続けたい問い」の共有と自己紹介

「どうやったらもう一回会えるか」

「この景色をどう感じますか」

「どうしたら出口を設計できるか」

「会えないこと、永遠に会えないことが、どういった意味をなすのか」

「差別・偏見のことばを考えたい」

「差別がなくなるってどういう状態なのか」

「誰が、何を、どのように、聞く・書く・語る・撮るのか」

「誰目線によりそうか」

「他人のことを想像しきれないということ、どうやって割り切れるのか」

「福島との比較。制度・体制側の責任、科学者の責任、何に依拠して誰によりそってどう判断する？」

「『住まい』とは何か？」

「愛生園に住んでいた人たちの幸せを見つけたい」

「人間らしく生きるとは」

「愛生園の景色・光景(と、そこでかんがえたこと、空間の意味)をどのように共有するのか」

「何が残るか、何を残すか。ありふれたものの中に、みんなが日常の生活をちょっとでもよくしようと思って、のフォーメーションを見逃さないように」

「多項併存的な活動？」

「全てがそろっている。表向きの面・裏向きの面・選択できるということ」

「入所者の方にとって生きるとは？日常的な営み・学ぶ側のエゴイズム」

「残すことのあり方」

「私に勝てるかい？」

2 内容の非公開について

今回、「捏造ワークショップ」において各グループが想像した内容の公開は、慎重に判断すべきである。この取り組みは参加者の学習プログラムとして組み立てたもので、現実生きた一人ひとりの人生に対する敬意が不可欠である。想像されるもう一つの世界に対する価値判断は、不幸を生んだ要因を分析・批評することのために用いられるべきで、実際に生きた人の生活や人生とは切り離すべきと考える。ご本人が選べたかもしれない別の人生を、ありえなかった現実の中で肯定することに対して、予想以上に感情的な抵抗が生じてしまった、というのが私自身の実感である。この私の実感に共感する人は少ないかもしれないが、自分とは異なる受容をする人のことまで想定して検討した上で、妥当な公開方法を判断すべきである。

今回の活動は、成果物を前提としたアイデア探しを目的としておらず、あくまで参加者の研修が目的であった。研修の目指すところは具体的な知識ではなく羅針盤的な資質であることを、重ねて確認しておきたい。

○ 企画・進行担当として

今回の活動は、長島の皆さんへの敬意をも涵養することにつながることを当然の目的としていました。それは自明のことでもあって言葉に出すことはあまりなかったのですが、この活動を行う際には意識的に確認すべきでした。何より私自身の中に生じた「知ろうとする、学ぼうとすることの暴力性」について、きちんと表現し伝えるべきであると思い、この場をお借りしました。

謙虚に時間をかけて、学び続け考え続けることは当然大切なことながら、一方で残酷な戦争のニュースに無力感と悔しさと焦りを禁じ得ません。この会報誌が発行される頃には状況が改善されて欲しいと願いつつ、愛生園での学びもエネルギーにして、出来る活動をしていくほかありません。パレスチナで姉を失った女の子の「彼女は天国に行った。だからよかったんだ」という発言を、どう受け止めるべきか。彼らへの敬意をどう言葉にすべきか、迷います。

今回の研修は、参加者の皆さんの熱心な取り組みにより、今後の人権学習プログラム作成に向けて重要な示唆をいただく活動となりました。重層的なことがらを安易に分解せずに複雑なままで受け止めること、言葉になりにくいことや数直線的には示せない違いを何らかのかたちで共有すること、体内の羅針盤を鍛えること、その他にも私たちが学ばねばならないことはたくさんありそうです。是非とも今後とも多くのご協力を賜りたいと思います。



「長島愛生園探訪」2日間のフィールドワークとワークショップを終えて

長島愛生園「恩賜記念館」現地調査を開始

恩賜記念館は、長島愛生園「一朗道」南の山の上に建つ木造平屋建（地階RC造）の歴史的建造物です。貞明皇后の御下賜金とその他の寄付金を原資として1941（昭和16）年に着工されましたが、戦時中の建築資材不足から終戦直前の1945（昭和20）年に竣工。当初は青少年入所者を育成する「恩賜道場」として建設されましたが、1950（昭和25）年にハンセン病関連の資料と参考品を展示する「恩賜記念館」として開館しました。1986（昭和61）年には内部を改装し、1994（平成6）年には「資料館」へと改称し、資料の管理整理のために係員（宇佐美治氏、故人）が配置され、今日の愛生園歴史館の基礎を築きました。

一方、これまで本格的な建物の調査は実施されておらず、当初の設計図や写真等の貴重な資料も豊富に残されていることから、本年10月10日に開催された本法人ロードマップ委員会は恩賜記念館の現地調査を実施し、実測図面や構造調査に加えて具体的な活用策を協議・検討し、国の登録有形文化財（建造物）への登録を目指すこととなりました。



竣工直前の恩賜記念館。建具がまだ入っていない。
（長島愛生園歴史館蔵）



現在の恩賜記念館（ドローンによる空撮）



オリジナルの木製建具を備えた時代
（長島愛生園歴史館蔵）



現在。昭和60年代の改修で建具がアルミ製に変更された。



床下調査。新築時と推定される床組と基礎を確認。



ローリングタワーを用いた屋根裏調査

令和5年度

長島愛生園無料見学バス

運行日 2023年10月21日より運行中
2023年11月11日以降は月1回第2土曜日運行
(2024年4月まで)

料金 無料

人数 45名(最低催行人数5名)先着順

行程 J R 邑久駅発 12:30 ~車中でビデオ視聴~
長島愛生園着 13:00 長島愛生園歴史館
長島愛生園発 15:00 納骨堂下
J R 邑久駅着 15:30



申し込み方法 長島愛生園歴史館お申し込みフォーム
<http://www.aisei-rekishikan.jp/tour.php>
または電話にて
0869-25-2212(内線:541)



岡山県瀬戸内市ふるさと納税でご支援ください

後世に伝えたい
ハンセン病の歴史プロジェクト

未来につなげたい、大切な記憶

寄附する
お支払い

お支払い
お支払い
お支払い

後世に伝えたい
ハンセン病の歴史
プロジェクト
世界遺産登録を目指して

このプロジェクトへの寄附額: 2,348,000円
(2020年8月27日以後の寄附額を指す)

返礼品を
見る

本法人の活動費は、岡山県瀬戸内市に寄せられたふるさと納税でお支えいただいています。平成29年度から令和4年度までの間に、合計1900名の皆様からご寄附をいただき、長島愛生園「監房跡」の調査や設計、邑久光明園「旧少女少女舎」の実測調査に活用させていただいております。ふるさと納税の寄附先を検討中の方がおられましたら、私どもの取り組みをご紹介します。

岡山県瀬戸内市ふるさと納税特設サイト
<https://setouchi-cf.jp/nagashima/>



編集後記

■10月4日、本法人の事業打ち合わせと世界文化遺産視察のため、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産群」構成資産の「外海(そとめ)の出津(しつ)集落」(長崎市)を訪れました。

■出津集落は西に東シナ海と五島列島を望む起伏の大きな傾斜地に位置し、キリシタンの「潜伏」が終焉を迎えた地です。1868年に来日したフランス人宣教師のド・ロ神父は、パスタやマカロニといった加工品の製造を現地の人々と行いつつ、崩れにくい「ド・ロ壁」と呼ばれる石壁を考案。その石積集落景観は、重要文化的景観に選定されています。

■現在、当地では神父ゆかりの地を歩いてめぐるフィールドミュージアムの整備が、宗教関係者と地域の人々により進められています。長島では遺産を守り、引き継いでいくために不可欠な要素としての人々をどのように想定し、確保することができるのかということを考える契機となった一日になりました。

編集・発行

特定非営利活動(NPO)法人

ハンセン病療養所世界遺産登録推進協議会事務局

〒701-4501岡山県瀬戸内市邑久町虫明6539番地

(長島愛生園入所者自治会役員選出委員会選挙事務所棟内)

TEL: 0869-24-8872 FAX: 0869-24-8873

email: hansen-wh.jp@aiores.ocn.ne.jp

開所日: 火曜日~土曜日

閉所日: 日・月曜日、祝日、振替休日、年末年始

開所時間: 午前9時~午後5時



ご寄付いただいた皆様(R5.3.19~R5.11.14)

藤澤祥子 様 10,000円

藤岳尋幸 様 5,000円

本幡照夫 様 5,000円

匿名様7件 金額非公開

合計10件 156,269円

◎この会報誌の著作権は本法人に帰属します。無断転載はご遠慮ください。